

---

# 夢い現実の中で

risu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

儚い現実の中で

### 【Nコード】

N8586U

### 【作者名】

risu

### 【あらすじ】

兄が記憶喪失の物語      Bの物語

妹が両足が動かなくなった物語      Cの物語

父が亡くなった物語      Dの物語

同じ登場人物のはずが、物語によって性格が変わる  
そんな物語を描いてみました

## **Bの物語（前書き）**

Bの物語　兄、浩太が記憶喪失の物語です  
同じ登場人物のはずが、物語によって性格が変わる  
そんな物語を描いてみました

## Bの物語

不意にわたしは兄の顔を見る。

居心地の悪そうに、兄は強張った顔で自分のベッドに腰掛けた。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

わたしがそう尋ねると、兄は驚いたように身体を震わせ、

「あ、はい。大丈夫です。すみません」

そう答えた。

その兄の言葉を聞いた瞬間、心が締め付けられる。

「敬語やめてよ……わたしたち兄妹なんだよ？」

耐えきれなくなったらわたしはそう兄に告げる。

「す、すみません」

兄は申し訳なさそうに謝ってきた。

「……お兄ちゃん」

兄は変わってしまった。

「ご、ごめん」

そう、変わってしまった。

食卓

「うまいか？ 浩太」

父が兄にそう尋ねていた。

「あ、はい、おいしいです」

そんな父の問いに兄は他人行儀に答える。

「そう、良かったわ」

母は笑顔でそう言ったが、心無しか目が笑ってなかった。

「……」

弟も静かに食事を済ましているだけ。

一言もしゃべらなかつた。

わたしの部屋に弟がやってきたのは夜九時ぐらいだった。

正直迷惑だったけど、入れてやった。

「お姉ちゃん」

弟はそう居心地悪そうに尋ねてくる。

「なによ」

正直、苛立つてたわたしはきつく返答した。

「気持ちわかるけど、もう少し元気だそうよ」

わたしにいつもの元気がないのはお見通しか。

まあ、こんなにも不機嫌な態度を取ってれば誰にだってわかる。

「わかつてるよ」

わたしは兄が大好きだ。正直、ブラコンと言ってもいいくらい。

だからこそ、兄に自分のことを忘れられたことにショックを受けている。

そして、兄に甘えられないことがわたしを更に苦しめている。

「ボクたちがお兄ちゃんを支えていかなきゃいけないんだよ？」

「わかつてるって言ってるでしょっ！」

見透かされたような気がしてつい怒鳴ってしまった。

でも、抑えることなんて出来ない……感情が溢れてくる。

「わかつてるけど……でも……今のお兄ちゃん違うよ」

違う……前のお兄ちゃんと全然違う。

「他人行儀で……すっごい気を使ってる」

兄妹なのに……昔はあんなに仲良かったのに！

「あんなの……わたしの知ってるお兄ちゃんじゃないよ！」

「……お姉ちゃん」

学校の下駄箱前。

わたしと兄は一緒に登校してきた。

「お兄ちゃん……大丈夫？ わたしついていこうか？」

まだ学校に慣れていないはずだ。

一昨日までは一緒に教室までついていった。

正直、上級生のクラスは怖かったが、兄を無事に教室に送り届ける為だ。

他の人ももう兄の事情については知っている。不思議がることはないだろう。

「あ、いや、大丈夫で」

まだ敬語だ。

「と思う」

わたしが表情に出していたのか、兄は砕けた言葉に直す。

そんな姿がちよっと滑稽だったから、少し和んだ。

「でも、心配だよ」

兄は大丈夫というけど、わたしからしたら心配で仕方ない。

やはり、わたしがついて行った方がいいかもしれないな。

「おーい、浩太」

そんなことを考えていると、後方からそんな声が聞こえた。

「あ、哲さん」

振り返って確認すると、そこには兄の友人の哲さんが居た。

「お、凜ちゃん、はよー」

「おはようございます」

相変わらず元気な人だ。

爽やかな笑顔をわたしに向け、挨拶をしてきたのでわたしも返す。

「浩太もはよー」

兄にも笑顔で挨拶。

「お、おはようございます。哲くん」

兄はぎこちなくそう挨拶を返す。

「……は、はは。お前に敬語でくんづけとか変な感覚だ」

兄の反応に哲さんは苦笑いを溢す。

「い、ごめん」

また兄は申し訳なさそうな顔して謝る。

「いや、気にするな」

哲さんは何事もなかったように笑顔で答える。

本当、哲さんが兄の友達で良かったと思う。

「凜ちゃん、こいつは俺が世話するから心配しなくていいぜ？」

「あ、そうですか……じゃあ、お願いします」

まあ、哲さんなら大丈夫だろう。

「じゃあ、凜ちゃん」

ちゃん……って。

「ちゃんづけやめてよ」

「あ、ごめん。えっと……」

ついきつい言葉で返してしまった。

「呼び捨てでいいから」

「あ、うん。凜、行ってくるね」

やっぱり、呼び捨ての方がしっくりくる。

「うん、行つてらっしゃい……哲さん、兄をお願いします」

「はいはい。任せました」

哲さんは元気に頷いた。

「なんでこんなことになっちゃったのかな」

わたしの部屋にまた弟がやって来た。

いつもは兄の部屋に集まるのに。

「それは……仕方ないよ」

弟はそう答える。……仕方ないか。

「そうだよね……あそこでお兄ちゃんが居なかったら」

そう、居なかったら。

居なかったらどんなことになっていたのか。

「……」

弟は口を閉ざしている。

「……お兄ちゃんについて一番悩んでるのはお母さんだね」  
そう、お母さんが一番苦しんでいる。

なのに、わたしは自分のことばかり。

「やめよう……ボクたちはお兄ちゃんを支えていく、それでいいじゃん」

「……ごめん。わたし、お姉ちゃんなのに……」

わたしなんかより弟の方がしっかりしているかもしれない。

「いいよ……お姉ちゃんがお兄ちゃんのこと大好きなの知ってるし」

「べ、別にそういうわけじゃ」

な、なに言い出しているの？ この馬鹿は。

「ボクはお兄ちゃんもお姉ちゃんも大好きだよ？」

え……？

「例え、記憶が無くなって……ボクたちとの思い出が無くなっても」  
「……弟」

そうだよ。辛いのはわたしやお母さん、お兄ちゃんだけじゃない。  
い。

弟だって辛いんだ。

わたしがしっかりしないと。

家 リビング

「おーい、凜」

「なに？ お父さん」

リビングのソファで漫画本を読んでいると父が話しかけてきた。  
「ちょっと、倉庫から探して欲しいものがあるんだが、頼まれてくれるか？」

「えー自分でやってよー」

正直、めんどくさい。今、いいところだし。

「お父さん、ちょっと今から家を出ないといけない用事があるんだ」



よ」

用事？ 仕事かな？

「それなら、弟に頼んで……それかお兄ちゃ……」

いつもの感覚で言ってしまった。

そして、後悔する。

「弟は今居ないんだよ。浩太か……浩太に頼むか」

「いや、いい。わたしがやるよ……なに探せばいいの？」

兄は記憶喪失なのだ。倉庫の場所なんてわからないだろう。

それに……わたしは兄を支えていきたい。

「ああ、えつとな、木箱みたいなのが倉庫の奥の方にあるはずなんだよ。それを取り出してくれ。倉庫の前に置いてくれれば良い」

「了解」

えつと、木箱を探せばいいんだよね？

それを倉庫の前に置くと。

「それと注意しろよ？ 物がたくさんあるからな。あの倉庫は父さん達が住む前から、おじいちゃん達が使ってそのままだからな」

「整理しなよ」

そのままだから危ないんだって。

「そのうちな」

「……もう」

絶対する気ないな。

倉庫内

「物あり過ぎ……」

整理整頓など一切されてなく、ごちゃごちゃに物が置かれている。埃っぽいし、最悪。

「こんな中から木箱探すの？ めんどくさいなあ」  
わたしは溜息をつきながらも作業に移った。

「あつたっ」

木箱だ。意外と手前の方にあつて見つけやすかった。

「ふう……疲れた」

ちよつと、汗掻いたかな。暑い。

「えっと……これでいいんだよね？ すっごく古いけど」

おまけにボロボロだ。

「まあ、いいか。違つてもわたし知らない」

違つてもわたしが困るわけじゃないしいいでしょ。

#### 倉庫前

「外に置いとけばいいんだよね」

そう言つてたよね、確か。

「木箱の中になが入ってるんだろう」

こんな古い木箱なんかなんで必要なんだろう。

中になにか重要なものが入つてるとか？

「……気になる。ちよつと、覗いてみよう」

好奇心に負け、わたしは木箱をあけることにした。

蓋を掴み、ゆっくりと開ける。



## Bの物語（後書き）

他に妹の凜が両足が動かなくなる物語      Cの物語  
父が亡くなったDの物語を書く予定です

## Cの物語（前書き）

Cの物語 妹、凜の両足が動かなくなつた物語です

## Cの物語

「……凜」

俺は妹に話しかける。

「……なに」

妹は不機嫌そうに返答。

「いや……」

俺はなにも言えなかった。

「……」

妹は両手でタイヤを漕ぐ。

しかし、非力なこいつの力では思うようにスムーズ動かない。

「俺が押してやるよ」

俺がそういうと妹はタイヤから手を放した。

後ろから取っ手を持ち、押す。

キコキコという音が虚しく廊下に響いた。

「はぁ……」

俺は思わず溜息を吐いた。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

そんな俺を心配したのか弟が話しかけてきた。

「ああ、大丈夫だ。でも、凜が心配だな」

昔はあんなにも明るかったのに。

今ではそんな素振りは影も形もない。

「仕方ないよ……」

弟は辛そうな顔でそう呟く。

「車椅子ってあんなにも苦勞するんだな」

体験してようやくわかった。

もし、街中で車椅子で苦勞している人が居たら、手助けしたいと思う。

「俺達が支えていかなきゃな、勇太」

「……そうだね」

俺の言葉に弟は少し間を置いて頷いた。

夜 11時。

元の父の部屋、今は俺の部屋だ。

妹のわがままで俺の部屋はここになった。

そんな部屋でくつろいでいると、コンコンという扉を叩く音が聞こえた。

「……ん？」

誰だろうか？ こんな時間に。

弟？ 母？ 父？ それとも……

「お兄ちゃん？ 居る？」

やはり、妹だったか。

「ああ、どうした？ トイレか？」

トイレに行く時、時々、起こされてついていくことがある。

「ううん。違う。開けて？」

違うのか？ じゃあ、何の用だ？

「ああ」

怪訝に思いながらも扉を開ける。

「……」

キコキコと車椅子を動かしながら、俺の部屋に入ってくる。

「どうした？」

「お兄ちゃん、一緒に寝たい」

俺の問いにそう妹は答えた。

「え？」

「いいでしょ？ 一緒に寝ても」

俺の戸惑いに妹は不機嫌そうな顔をする。

「いや、でも、ベッド狭いぞ？」

「狭くてもいい」

狭くてもいいって……このベッド、シングルだから本当に狭いんだよな。

落っこちでもらっても困るし……。

なんとか説得するか。

「でもなあ、お前の部屋の方がトイレとかリビングに近いし、なにかあった時」

「一緒に寝たいの！」

必死の形相で妹は怒鳴ってきた。

「一緒に寝てよ！ お兄ちゃんにはその義務があるんだよ！？」

「……凜」

「折角お兄ちゃんが戻ってきたんだもん……甘えさせてよ」

「……」

「お兄ちゃん……お兄ちゃんはわたしに恩があるんだよ？」

「……わかったよ」

俺はただ頷くことしかできなかった。

妹を抱え、先にベッドに寝かせ、その後に俺がベッドに入った。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんっ」

妹は俺の身体にしがみついてくる。

「お兄ちゃん……お兄ちゃんっ」

更に俺の胸に顔擦りつけ、匂いを嗅いできた。

「お、おい、そんなに抱き付くなよ」

流石に焦った俺はそう妹を諭す。

「いいじゃん、兄妹だよ？」

しかし、妹は気に入らなかったのか不快そうな表情を浮かべる。



「兄妹でも……やり過ぎだ」

「……なにそれ」

一気に冷めた表情へと変わる。

「お兄ちゃんはおわたしに恩があるのにそんなこと言うんだ」

そんなことを告げる。

恩ってなんのことだよ……俺は妹に恩なんてない。

「前から思ってたけど、その恩ってなんだよ」

「恩は恩だよ。お兄ちゃんはおわたしに一生返せない恩があるんだよ」  
最近いつもこれだ。

「だから、もつと優しくしてよ、甘えさせてよ、お兄ちゃんっ」

そう言っただけの身体にしがみつく。

まるで見捨てられまいとするように。

「……」

「妹は変わった……」

弟の部屋のベッドに腰掛け、俺はそう呟いた。

「そう……だね」

その呟きに弟は答えてくれる。

「昔から甘えん坊だったけど……」

「今は異常なくらいお兄ちゃんに依存してる」

俺が言おうとした言葉を弟が紡ぐ。

「気持ちにはわからなくもないが……」

確かに気持ちはわかる。

両足が動かなくなれば誰だって、暗くなる。

誰かに依存したくなる。

それでも……あいつは異常だ。

「それに執拗に俺は妹に恩があると言ってくる」

「恩ってなに？」

「知らない。でも、執拗に言ってくるだ」

そう、執拗に。  
毎日、毎日。  
まるで俺を責めるように。

食卓

「はい」

母が父に茶碗を渡す。

「おう」

父が受け取る。

「はい」

母が俺に茶碗を渡す。

「さんきゅ」

俺はそう言って受け取る。

「はい」

母は弟に茶碗を渡す。

「ありがとう」

弟はそう礼を言って受け取る。

「はい」

母は妹に茶碗を渡す。

「お兄ちゃんに渡して」

妹は受け取らず、そう告げた。

「え？」

そんな妹の言動に母は困惑する。

「お兄ちゃんに食べさせてもらっから」

こいつは……。

「おい……手は使えるだろ」

俺は責めるようにそう指摘してやる。

「使えるから？ なに？ 食べさせてよ」

しかし、妹はまるで堪えてないかのようにそう告げた。

「あのなあ」

イライラしてきた。

なんで、こいつは……。

「なんでそんな顔するの？ 怖いよ……お兄ちゃん」

本当になにもわからないという表情を浮かべている。

ずつと募っていた不満が沸々と沸き上がってくる。

「俺はお前のお世話係じゃないんだぞ！ 出来ることくらい自分でやれ！」

そして、ついに爆発した。

「浩太っ、やめなさい！」

父に制され、俺はなんとか落ち着きを取り戻そうする。

「なんで？ なんでお兄ちゃんは怒鳴るの！？」

こいつ！ まだわかってなかったのか！

「それはお前が」

「お兄ちゃんはわたしに恩があるのにつ！ そんなこと言わないでよ！」

またそれかよ！

「お兄ちゃんがお兄ちゃんじゃない時はわたし頑張ったのにつ！」

「お前、またそんなわけわからんことを」

「お兄ちゃんの馬鹿っ！ これなら前の方が良かったっ！」

妹は車椅子を自分で動かし、扉の方へと向かっていく。

「お、おい……」

「……っ」

ボタンッという扉の閉まる音だけが食卓に響く。

「……はあ」

俺はテレビを観ながら溜息をついた。

「浩太、ちよつと、いいか？」

そうしてると父が話しかけてきた。

「あ、うん、いいけど」

「ちよつと、頼みたいことがあるんだ」

頼み？

「なに？」

「ちよつとな、倉庫から探し物してくれないか？」

「探し物？ なにそれ」

倉庫に探し物って。

「ああ、木箱を探して欲しいんだ」

「木箱？」

なんだそりゃ。木箱が必要なのか？

「倉庫の奥にあると思うんだが……昨日探したんだが見つからなくてな。見つけたら倉庫前に置いといてくれればいい」

「いいよ、今は暇だし」

いつもは妹の世話に追われてたけど、今は絶賛喧嘩中。暇だ。

「……早めに仲直りしろよ」

「わかってる」

父には俺の気持ちがバレていたようだ。

「じゃあ、頼む。物がたくさんあるから注意しろよ」

「はいはい」

「詰め込みすぎだろ……ちよつとは整理しろよ、父さん」

倉庫内はゴチャゴチャと物が置かれていて、埃っぽかった。

「はあ……探すか」

めんどくさいが探そう。

「これか？」

しばらく漁っていると古いボロボロの木箱を発見した。

「これっぽいな」

外に出て、倉庫前に置いとけばいいんだよね？

俺は倉庫の外に出ると、改めて木箱を確認する。

「うーむ、それにしても古いな」

ここまでボロボロになるくらいだし、相当昔の物だろう。

「ちよつと中覗いてみるか？」

ゆっくりと蓋を開けてみる。

「ん？ 本が入ってる」

中には古本が入っていた。

「……ボロボロだな」

本に触れ、表紙を開く。

「中はなにも書いてない……白紙か」

黄ばんではいるが、どのページにもなにも書かれていない。

「こんなに必要なのか？ 父さん」

なんに使うんだろう？ こんなもの。

「まあ、いいか」

パタンツと本を閉じる。

「ここに置いとけばいいんだよね？」

木箱に戻し、蓋をして倉庫前に置いた。

家 リビング

「……あんま面白くないな、テレビ」

ブルルンという車のエンジン音が外から聞こえる。

「ん？ 父さんが帰ったみたいだな」

しばらくテレビを鑑賞していると、扉の開く音が聞こえた。

「ふう……疲れた」

父は汗をハンカチで拭いながら、そう呟いた。

「あ、父さん、木箱見つけておいたよ」

父が戻ってきたのを認めて、そう報告する。

「そうか、ありがとうな」

「うん」

俺は父の感謝の言葉に適当に頷いておく。

「じゃあ、早速見に行ってくるかな」

そう言っ父はまた外に出た。

「あ、結局、あの本なんの本か聞けば良かった」

今になって思い出した。

あの本結局なんだったのだろうか？

古くてしかも白紙。

「まあ、いいか、後で」

テレビの音だけがリビングに響く。

「凜の奴……まだ怒ってるかな」

怒ってるだろうな……昔っから執念深いし。

「仕方ない……あやま

## Dの物語（前書き）

父が亡くなった物語です

## Dの物語

「はぁ……………」

兄は溜息をついた。

「お兄ちゃん…………大丈夫？」

姉はそれを心配するように気遣う。

「ああ」

兄はそう頷いた。

「勇太もよく頑張ったな」

そう言つて、兄はボクの頭を撫でてくれる。

「…………うん。お兄ちゃん、ぎゅっとしていい？」

「おう」

ボクは兄に思いっきり抱き付く。

「あー、勇太だけずるい」

姉が不満そうな声を上げた。

「こらこら、お前はお姉ちゃんだろ？」

苦笑しながら兄は姉を諭す。

「そうだけど……………」

姉はボクを羨ましそうに見つめる。

「お姉ちゃん」

「わっ…………勇太」

ボクは姉に抱き付いた。

「弟が甘えん坊になっちゃったな」

「…………仕方ないよ」

姉はそう言つてボクの頭を撫でる。

「…………そうだな」

兄は悲しそうな表情を浮かべ、そう頷いた。



「母さん」

兄が母を呼び掛ける。

「……」

しかし、母は反応しない。

「母さん、夕飯出来たよ」

そう兄が言うも、

「……」

母は反応しない。ずっと、テレビを見つめている。

「わたしたちだけで食べよう？ 後で食べるよ」

「そうだな」

「……」

家族三人の食事が始まった。

「母さん、まだあの調子か」

「……うん、ずっとあんな感じ」

「まあ、仕方ないか……父さんが死ぬを眼の前で見たんだから」

「勇太も……そうなんだよね」

「……ああ」

「……」

「とにかく、母さんを病院連れて行かないといけないな」

「……そうだね」

「俺は……学校やめて働くか」

「べ、別にまだいいんじゃない？」

「そうか？ でも、母さんがあんな感じだしな」

「高校は出た方がいいよ」

「……そうだよな、今、不景気だし」

「こう言ったらあれだけど……お父さんの保険金もあるし」

「……高校だけは卒業するか」  
「うん、そうした方がよいよ」  
「……すまん」  
「なんで謝るの？」  
「いや、俺がすっかりしないといけないのに、お前にこうやって頼  
つてばかりで」  
「い、いいよ。お兄ちゃんに頼られるの嬉しいし」  
「それに……お母さんがあんなだし」  
「……ふたりに頑張っでいこう」  
「……うん」  
姉の部屋でそんなふたりの会話が聞こえた。

「寝るか」

コンコン

「ん？ 誰だ」

「……」

「勇太」

兄はボクを認めると少し驚いた顔した。

「お兄ちゃん、一緒に寝ていい？」

ボクは兄にそう尋ねる。

「あ、うん、いいぞ」

ボクは兄の身体に抱き付いた。

「お兄ちゃん」

ベッドに並んで横になり、そう兄を呼び掛ける。

「なんだ？」

すぐ反応があつた。

「手繋いで」

「おう」

ボクの頼みをすぐに了承してくれた。

「……」

ボクは兄の手を握る。

すると兄も強く握り返してくれた。

安心する。すごく安心する。

「寝たか？」

「……まだ」

しばらく経つて兄がそう尋ね、ボクは返答する。

「そうか」

「……」

不意に扉を叩く音が聞こえた。

「ん？」

兄はベッドから出ると、扉の方へ向かう。

そして、扉を開ける。

「こ、こんばんわ」

扉を開けた先に姉が居た。

「どうした？」

「一緒に……寝ていい？」

兄の問いに姉はおずおずとそう告げる。

「お前もか」

兄は呆れたような顔をする。

「お前も？」

そう言つて姉は部屋の中を覗く。

「……………」

「あ、弟」

ボクを見つける。

「あいつもさつき来たんだよ」

「……………むう」

姉は不満そうに唸る。

「なんでむくれてんだよ」

「べつに」

姉はぷいっと顔を逸らす。

「やきもちか？ 自分に甘えてこないから」

「……………ぐう」

図星だったのか姉は言い返せず唸る。

「図星かよ」

兄は呆れた顔をする。

「ゆうたー、今度からお姉ちゃんに甘えるんだよ？」

ボクは何度も頷いた。

「はぁ……………まあ、寝るか」

兄は溜息を吐きながら、こっちへと向かってくる。

「……………」

姉は兄の手をぎゅっと握る。

「……………」

ボクも兄の手をぎゅっと握る。

「……………」

そんなふたりの手を兄は強く握り返してくれた。

「いつぶりだろうな」

兄が唐突にそう呟く。

「なにが？」

姉が尋ねる。

「こつやって三人で寝るの」  
「うーん……小学校以来？ 弟は幼稚園だけど」  
兄の問いに姉が答えた。  
「そんなもんか」  
「……うん」  
「……」  
「お前らは俺が守るからな」  
「……うん、頼んだ」  
「……」  
ボクは肯定を示すように強く手を握った。

## 家 リビング

「よっし！ お前ら今日は休日だ！」  
唐突に兄が叫ぶ。  
「……うん、そうだけど、なんでそんなテンション高いの？」  
姉は呆れたように兄を見つめる。  
「それは俺が一家の大黒柱だからだ！」  
その問いに自慢げに兄はそう答えた。  
「……うざいと思います」  
「……」  
ボクと姉は兄に冷たい視線を送る。  
「……ちょっと、調子に乗りました」  
「で、なに」  
仕切り直すように姉が兄に尋ねた。  
「ああ、休日だし、掃除でもしようと思ってな」  
「えーめんどろ」  
姉は嫌そうに告げる。  
「妹よ。兄と一緒に頑張ってくれてるって言っただろっ？」

「まあ……そうだけど」

納得してなさそうに姉は呟く。

「だからこそ、俺達、兄弟愛きょうだいを深める為にまず大掃除だ」  
「なんで兄弟愛を深めるのに掃除？」

怪訝そうに姉は尋ねる。

「いいだろ？ 掃除は心を綺麗にするって言っし」

「答えになってないんだけど」

姉の視線は冷たい。

「あーもー、うるさい妹だっ。勇太は賛成だよな？」  
ボクは頷く。

「ほら、勇太は素直だ。かわいい」

兄が撫でてくれる。  
きもちいい。

「なっ……むう……わ、わたしだって素直だし」

姉はそう言っつて、兄に近寄る。

「すり寄ってくるな、馬鹿」  
「なっ」

ちよつとショックを受けたような表情を浮かべる姉。

「お前も撫でてやるから」

兄はそう言っつて、姉の頭を撫でる。

「……」

姉は撫でられると大人しくなった。

「嬉しそうだな」

「う、うっさい！ 掃除するんでしょ！ さっさと役割決めてよ！」

姉は顔を真っ赤させながら、兄の背中を叩く。

「わ、わかった！ わかったから、叩くな！」

「おうつ、決めた」

しばらくして、兄がそう告げる。

「早く発表して」

姉がそう兄を急かす。

「焦るな焦るな」

そう言いながら、兄は役割を書き込んだ紙を見る。

「えっと、凜、お前は風呂やキッチンを綺麗にしてくれ。後、キッチン棚の整理な」

「うん、わかった」

姉は頷く。

「俺は窓や床、それからトイレ……後は色々だな」

「なにそれ」

兄の雑さに姉が突っ込む。

「うるさい。つつこむな」

「ボクは？」

このままだとまた兄と姉の喧嘩が始まってしまうので尋ねた。

「ん？ 勇太は……倉庫の整理してくれ。終わったら、俺の手伝い」

「……わかった」

倉庫の整理か。

「よし！ 頑張るぞ！ 掃除で家族愛を深めるんだ！」

「……」

「……」

姉はキッチンへ、ボクは外へと向かった。

「あの……無視は悲しいかな、お兄ちゃん」

倉庫前まで来ると、扉を開ける。

「……物多い」

倉庫内は物がゴチャゴチャと置かれていた。

正直、これを整理するのは相当な時間がかかると思う。  
でも、兄に頼まれたことだし。

やらないと。

「なにこれ」

倉庫を漁っていると、木箱が出て来た。

「木箱？」

とても古くボロボロだ。

なんとなく、興味が沸いたので開けみることにした。

「本」

中には古いボロボロの本が入っていた。

ゆっくりと手に取ってみる。

「……っ!？」

手に取った瞬間、辺りが真っ暗になった。

そして



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8586u/>

---

儚い現実の中で

2011年7月17日03時24分発行